

前副会長講演

教育現場での S S T

— 小学校での 3 年間の取り組みから見えてくるもの —

皿田 洋子 六本松心理教育臨床オフィス

2020年度の教育改革がスタートした。育成を目指す資質、能力のひとつに「学びに向かう力、人間性、どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか」があげられており、タブレットを使った学習ではまわりの人と協力して、コミュニケーション力を育むことも狙っているといわれている。コミュニケーション力に注意が向けられているのは評価されるが、周囲の人間といかにコミュニケーションをとっていくか、その基本となるスキルを身に付けることからはじめないと効果は得られにくいのではないだろうか。

演者らはちょうど教育改革に向けて動き出した2017年から3年間A市B小学校に出向いてSSTを実施してきた。この取り組みは、演者が2019年3月まで勤務していた福岡大学のブランディング事業として始められたものである。この事業は、「地域のすべての人たちが、心身ともに健康な一生を過ごせるようそれぞれのライフステージの抱える課題に取り組むもので、演者らは学校適応・活力ある人間形成のチームに属し、今の教育現場で起こっているさまざまな問題、いじめ、不登校などの背景には子どもたちの人間関係を築くことの難しさがあり、それに対処する方法として人間関係づくりのカリキュラムの整備が必要という考えに基づきスタートした。自分の気持ちや考えを表現する力をつけ、家族や友達と安心してかかわれる関係づくりの一助となることを目的としたものである。問題を抱える子どもを対象としたのではなく、全生徒を対象にクラス単位で実施した。初年度は4年生全員150名を対象に、学期ごとに2回行い、次の年は5年生、6年生と継続して3年間実施し、2019年3月で終了した。この取り組みについては、これまで北海道で行われた第23回学術集会で「生きる力が育つ学校文化を作る取り組み—SSTを実施して—」と題して紹介してきた。今回は3年間の総まとめとして振り返り、学校現場でSSTを実施することの意義、課題などを明らかにする。特に、社会的スキル、自尊感情の変化、子どもたちがこの授業をどう受け止め、実生活に活かしているかに着目し、さらにこの授業に携わった担任の教師がSSTをどのように認識したかを検討していく。